〔自著紹介〕

松野敏之

朱熹『小学』研究

汲古書院　**2021** 年

近世の東アジアに大きな影響を与えた朱熹（しゅき）（1130 ～ 1200）は、学問を「小学」「大学」に区分した。8 歳から学ぶ「小学」と、15 歳から学ぶ「大学」である。朱熹の学問は、後世「朱子学」と呼ばれ、中国・日本・朝鮮・ベトナム等広範囲の地域で学ばれた。これにより東アジアでは、学問に小学・大学という段階を設けることが浸透していくようになる。

朱熹が小学を学ぶためのテキストとして編纂したのが『小学』である。日本でも、江戸時代の藩校や書院、あるいは明治時代になってからも『小学』が教科書として読まれた。ところが二十世紀以降の研究者たちは、『小学』に関心を向けなくなった。

『小学』が注目されなくなった大きな理由の一つに著者問題がある。朱熹が亡くなってから 500 年以上経った 17 世紀頃より、『小学』は朱熹が編纂したものではなく、学友の劉清之に依頼して編纂させた書という見解が出てきた。実質的な編纂者は劉清之であると言われるようになり、20 世紀以降はこれが通説かのようになった。『小学』が朱熹の編纂書でないとすれば、関心を向けられなくなるのは仕方の無いことではある。

筆者は大学院生の頃、この著者問題が気になった。当時、通説とされていた『小学』は劉清之の編纂書という見解を、学部生の頃は疑うことなくそうだと思い込んでいた。大学院で原典の読み方や資料の扱い方を学び、自分である程度調べられるようになった頃、朱熹と劉清之がやりとりした書簡を確認してみた（現存するのは朱熹が劉清之に送った書簡 20 通）。どうも劉清之が『小学』を編纂したようには見えない。何故、劉清之の編纂という通説が繰り返されるのか不思議に感じられた。論文として、『小学』は朱熹の意図が反映された朱熹の編纂書であることをまとめた。『小学』の研究は、院生の頃の疑問と調査が出発点であった。

ただ、まだこの時は『小学』の全貌は見えていなかった。他にも原典からの修訂問題、朱熹自身の孝の問題など検討すべきことが多々現れてきた。16 年がかかってしまったが、『小学』に関する問題を検討し、まとめたのが本書である。

『小学』という書籍にはいくつかの特徴があるが、特に編纂者の朱熹が意を注いだのは、道理とそれに対応する故事を挙げたことである。人は「他人にやさしくしなさい」という道理を教わっても、分かったつもりになるだけで実践できないことは多い。そのような時、人にやさしくするとはどういうことか、『論語』ではそれを「自分がされたら嫌なことを人にはしない」と示しており、具体例を挙げた方が実感しやすい。

『小学』の例で言えば、仕事に取り組む姿勢として「欺くなかれ」という道理が示される。仕事において誤魔化してはいけないというものである。そのようなこと分かりきったものであるのであるが、これに呼応する故事として次のような話が挙げられる。

> 北魏の太武帝の寵臣に翟黒子（てきこくし）という人物がいた。并（へい）州に使者として赴いた時、布千匹の賄賂を受け取った。この収賄が発覚すると、翟黒子は高允（こういん）にどうすべきかと相談した。高允は「あなたは国家の重要機密に預かる寵臣です。罪があったとしても自ら事実を申し上げれば、許されるかもしれません。これ以上、欺きを重ねるべきではありません。」と答えた。ところが他の人々は、「もし事実を申し上げれば、どのような罪に問われるか分かりません。しばらく隠しておいた方がよいでしょう。」と勧めた。翟黒子は、高允を怨み、「あなたはどうして私を死地に赴かせるようなことを言うのか。」と言った。翟黒子は入朝して太武帝に謁見し、事実通りに返答をしなかった。太武帝は怒って、翟黒子を殺害した。（『小学』善行篇）

収賄が発覚した翟黒子は、それを隠そうとした。高允は「これ以上、欺きを重ねるべきではない」と勧めたが、翟黒子は隠すべきだという意見（自分が信じたい意見）に従い、むしろ高允を怨むに至る。結果、下手なごまかしをした翟黒子は殺されてしまった。

職務に対して「欺くべきではない」ということは誰しも分かっていることではあろう。ところが人は翟黒子の立場になった時、同じ過ちを繰り返しかねない。何か重大な失敗をした時こそ、人は誤魔化そうとする傾向にあることをつきつけてくる。「欺くなかれ」という道理とともに、これを実感させるような故事を挙げるようにしていったのが朱熹の『小学』である。

（まつの　としゆき・教授）